

## 『秘密集会』『聖者流』における修道論

田中 公明

### (1) はじめに

筆者は、いままで『秘密集会タントラ』の解釈学派「聖者流」の Nāgabodhi/Nāgabuddhi に帰せられる『秘密集会安立次第論』（以下『安立次第論』と略）について、Rāhula Sāṅkrtyāyana (1893-1963) がチベットで撮影し、ゲッチンゲン大学が写真乾板のデータを保有するサンスクリット（以下 Skt. と略）写本から回収された原文を中心に研究を進めてきた。そして、その成果は、本誌と高野山大学密教研究会の『密教文化』<sup>(1)</sup>に寄稿した都合5篇の論文にまとめられた。

そして今回は、以前の5論文で扱うことができなかった『安立次第論』第3章末尾部分のローマ字化テキストを提出するとともに、その内容を概観することにした。筆者による『安立次第論』の原典研究は、本稿をもって一応の完結を見ることになった。そこで今回は、従来の5論文と本稿で取り上げた部分の対照表を掲載することにした。（表1）あわせて参照されたい。

なお本文献の Skt. 題名は、チベット訳によれば Samājasādhānavyavasthole となっている。いっぽう本写本には、Vyavastholi というタイトルが現れる。また本文献を引用する Muniśrībhadrā の Pañcakramaṭṭippanī の写本には、vyavastholyām (sg. loc.) なる語形が現れ、これを蔣・苦米地は vyavasthalyām (sg. loc.) と修補している<sup>(2)</sup>。このように『安立次第論』の原題については、さらなる検討が必要である。

表1 『安立次第論』の構成と掲載誌

章節	写本	丹珠爾	掲載誌	論文タイトル
第1章	21b2 23b4	337-1 345-16	東文研紀要156冊	判読困難なサンスクリット写本をいかに 修補するか？
第2章	23b4 24a9	346-5 349-6	東文研紀要160冊	『秘密集会』の身体曼荼羅論
第3章	24a9 25a2	349-7 351-4	『密教文化』 (未刊)	『秘密集会安立次第論』をめぐる諸問題－ 第3章所説の出生真言の解釈を中心に－
	25a3 26a6	351-13 355-21	東文研紀要148冊	Nāgabodhi の <i>Samājasādhānavyavasthāna</i> について
	26a6 26b2	356-2 357-4	今回発表する部分	
第4章	26b2 27b2	357-6 360-7	東文研紀要162冊	『秘密集会』における勝義の曼荼羅につ いて

## (2) 今回ローマ字化テキストを紹介する箇所

今回取り上げる『安立次第論』第3章の末尾部分は、ゲッチンゲン大学所蔵XC14/30のセクターAのfol.26a6から26b2に相当する<sup>(3)</sup>。

Sāṅkr̥tyāyana は、当時貴重品であった乾板を節約するため、一枚の板に9葉の貝葉を貼り付け、撮影が終わると9葉すべてを裏返して貼り付け、一括して撮影した。今回取り上げる部分のうち fol.26a は第5番目、fol.26b は第6番目の乾板に撮影されている。

チベット仏教ゲルク派の祖ツォンカパ (1357-1419) は本文献を重視し、『安立次第論註釈』 *rNam gźag rim pa'i rnam bśad, dpal gsañ ba 'dus pa'i gnad kyi don gsal ba* と名づける詳細な注釈書を著した<sup>(4)</sup>。同書では第3章の内容が、1. 出生曼荼羅自体 *phyuñ ba'i dkyil 'khor dños*, 2. 出生の所依の曼荼羅を教証によって説明する *phyuñ ba'i rten gyi dkyil 'khor luñ gis bsgrub pa*, 3. 質疑 *dris lan gyis dogs pa bcad pa* の3節に分けられ、さらに第3節は、(1) 四印によって本尊の身を捺印することに関する質疑 *phyag rgya bźis lha'i sku rgyas gdab pa la dris*

lan gyis dogs pa bcad pa, (2) 『秘密集会』の諸尊は三面であると説かれることに関する質疑'dus pa'i lha rnamś žal gsum par bśad pa la dris lan gyis dogs pa bcad pa, (3) 曼荼羅の尊数が一致しないことに関する質疑 dkyil 'khor gyi lha grañś mi mthun pa la dris lan gyis dogs pa bcad pa, (4) 成就者の身体に本尊を布置することに関する質疑 sgrub pa po'i lus la lha bkod pa la dris lan gyis dogs pa bcad pa の4段に分科されている。このうち(1)から(3)までは、すでに本誌148冊所収の拙稿で発表しており、本稿で取り上げる部分は(4)に相当する。この部分のみを後回しにしたのは、本誌148冊所収部分とは異なり、筆者がサンスクリット写本を発見した *Vajrācāryanayottama* に対応箇所が存在しなかったからである。

### (3) 第3章の内容

それでは前述のツォンカパの分科に従い、『安立次第論』第3章、3の(4)の内容を概観してみよう。まず全体は「質問」と「答説」に分けられる。

このうち「質問」は、「一切の煩惱を捨て去り、十力〔四〕無畏等の仏功德を有する仏菩薩を、この凡夫の身体に布置することは不適切ではないのか？」と問う。これは後期密教の生起次第系の行法の根幹をなす、仏菩薩との一体化や布置観に効果があるのかというラジカルな問いとなっている。

これに対して、痰壺は痰で満たされるが、同じ容器が食物の容器となれば食事に供される、さらに〔鑄つぶされて〕尊像となった場合は供養の対象にすらなるように、凡夫の貪瞋痴にまみれた通常の身体は輪廻の因となるが、〔諸法の〕自性を遍知すれば一切智の因となるのだから、過失はないと答える。

さらに三種の教証を挙げるが、このうち最初のものは、すでにツォンカパが指摘しているように、*Bodhicaryāvatāra* 1-10とほぼ同文である<sup>(5)</sup>。もしこれが *Bodhicaryāvatāra* から直接引用したものであれば、『安立次第論』の成立年代

の上限を確定する上で重要である。

つぎは『大宝積経』「迦葉品」からの引用である。この一節は、シュテール・ホルシュタインの漢藏梵合刊テキストの§73<sup>(6)</sup>に対応するが、ホルシュタインが参照した唯一のサンスクリット写本が欠けている部分なので、原文が参照できる点で貴重である。

最後は『秘密集会』の釈タントラ『密意解釈タントラ』*Sandhyāvyaḥkaraṇatantra*「第3章」からの引用である<sup>(7)</sup>。これも同タントラのサンスクリット原典がいまだ発見されていないため、貴重な引用といえる。

この後、何の結語もなく章題が示され、本章は終結している。なおゲッチンゲン写本は、本章を「第4章」*caturthaḥ paricchedaḥ* 記しているが、これは第3章の誤りと考えられる<sup>(8)</sup>。

このように今回取り上げた部分は、後期密教の修道階梯である二次第の第一、生起次第の根幹をなす仏菩薩との一体化や布置観に、果たして実効があるのかという問題を取り上げている点で重要である。なお内容の理解に資するため、サンスクリット写本とチベット訳、引用文献の対照表(表2)を作成したので、あわせて参照されたい。

表2 Nāgabodhi: *Samājasādhanavyavasthālī*, 3-3-4の構成

内 容	Skt. Ms.	北京版	丹珠爾	引用文献
質問	26a6	11-1-4	356-2	
答説	26a7	11-1-5	356-5	
痰壺の喩	26a7	11-1-5	356-5	
教証1	26a8	11-1-7	356-11	<i>Bodhicaryāvatāra</i> 1-10
教証2	26a9	11-1-8	356-13	<i>Ratnakūṭasūtra, Kāśyapaṭarivarta</i> §73
教証3	26b1	11-2-2	356-18	<i>Sandhyāvyaḥkaraṇatantra</i> , 3-22~24
章題	26b2	11-2-5	357-4	

(4) 回収されたサンスクリット原文

それでは以下に、Sāṅkṛtyāyana が撮影した写真とチベット訳、そして他の parallel passage から回収された『安立次第論』第3章3-4の原文を、中国蔵学研究中心編『丹珠爾』所収のチベット訳（頁の右側）と対照させつつ、掲載することにする。

本写本は、東インド系写本の常として ba と va の区別が無いが、注記することなく適宜転写した。また śa と sa もしばしば混同されており、誤綴には (sic) を付した。さらに写本では、sattva が常套的に satva となり、repha の後の子音が重複するなど、現在とは異なった正書法が見られるが、そのまま転写し訂正しなかった。

[ ] で括った部分は、筆者がチベット訳や parallel passage に基づき、判読不能や欠落している文字を修補した部分、いっぽう { } は、写本に存在する文字や記号が不要であることを示し、書き損じの文字が、抹消記号 parimārjanasaṅketa で抹消されている場合は {.....} とした。

(5) *Samājasādhanavyavasthālī* \* 3-3-4

āha	gsol ba/
sarvabuddhabodhisatvān	ñon moṅs pa thams cad spaṅs pa'i
sarvkleśaprahīṇān	saṅs rgyas dañ byañ chub sems dpa'
daśabalavaiśāladyādi-	stobs bcu dañ mi 'jigs pa la sogs pa
buddhagaṇaprāptā(26a7) n	saṅs rgyas kyi yon tan brñes pa rnam
asmin prakṛtadehe	'dir tha mal pa'i lus la
vinyased iti viruddhākhyāyikā	dgod pa mi 'gal lags sam/

āha/

yathā patadgrahāvasthāyā[ṃ]

śleṣmā sphāryate/

bhajanāvasthāyā[ṃ]

loko bhukṣkte/

pratimāvasthāyām

pūjā kriyate/

tathā prākṛtadeho

rāga-

(26a8) dveṣamohādayaś ca

pūrvāvasthāyām

saṃsārahetukāḥ

paścāt svabhāvaparijñāne

pariśuddhās

sarvajñajñāsādhanahetukā

bhavantīti na doṣaḥ/

tathācoktaṃ/

aśucipratimām imāṃ

grhītvā

[ji]naratnapratimāṃ karoty

anarghā[ṃ]/

rasajāta (26a9) matīva vedhanīyaṃ/

bka' stsal pa/

ji srid du bkru bśal gyi snod yin pa'i

gnas skabs su ni mchil ma 'dor la

g'zōñ pa'i gnas skabs su

'jig rten pa rnam s zas za'o//

gzugs brñan gyi gnas skabs su

mchod par byed do//

de b'zin du tha mal pa 'i lus la

'dod chags dañ

že sdañ dañ gti mug la sogs pas

brlan pa'i

snon gyi gnas skabs su

'khor ba'i rgyu yin la

phyis ran b'zin yoñs su śes śin

yoñs su dag pas

thams cad mkhyen pa grub pa'i rgyur

'gyur ba la skyon med do//

de yañ gsuñs pa/

śin tu mi gtsañ gzugs<sup>(9)</sup> 'di

gzun byas la//

rgyal ba'i rin chen gzugs byas

rin than med//

rtsi yis sbyañs pa lta bur bskyed pa

'di//

sudṛḍhaṃ gr̥hṇata  
 bodhicitta-  
 |sma| saṃjñam iti// (= BCA 1-10)  
 tathā cāha/  
 ratnakūṭasūtre/  
 tad yathā kāśyapa  
 śa (sic) kārākīrṇṇāyāṃ pṛthivyāṃ  
 sarvabījāni virohanti/  
 evam eva kāśyapa kleśasaṃkāra-  
 kīrṇṇe lokasanniveśe  
 bodhi (26b1) satvasya  
 buddhadharmā  
 virohantīti/ (= *Kāśyapaṣarivarta* § 73)  
 sandhyāvvyākaraṇamahāyogatantre  
 'py āha/  
 śū (sic) kṣmayogārthatatvajñam |h|  
 vajrapāṇiṃ yaśasvinam/  
 jagadadvayayogena  
 so 'vadat sandhāya śū (sic) kṣmakam//  
 //  
 pañcākāram imāṃ bodhir  
 nagāmijanahetukām/  
 dharmasaṅgī (26b2) tikāye 'smin  
 bhāṣante ca yathāyatham//  
 skandhā ete hi buddhāḥ syur

byañ chub sems ni rab tu brtan par  
 gzuñ//  
 zes bya ba dañ/  
 de bzin du yañ  
 dkon mchog brtsegs pa'i mdo las/  
 'od sruñs 'di lta ste  
 lud kyis g-yogs pa'i sa gzi la  
 sa bon thams cad skye bar 'gyur ro//  
 'od sruñs de bzin du ñon moñs pa'i  
 lud kyis khyab pa'i 'jig rten pa rnam la  
 byañ chub sems dpa'i  
 sañs rgyas kyi chos rnam  
 skye bar 'gyur ro zes gsuñs pa dañ/  
 dgoñs pa luñ ston pa zes bya ba'i rgyud  
 las kyañ/  
 phra mo'i sbyor don de ñid śes//  
 phyag na rdo rje grags chen la//  
 'gro ba gñis med sbyor ba yis//  
 phra mo'i de ñid dgoñs pas gsuñs//  
 mñon par byañ chub rnam lña 'di//  
 ma 'oñs (357) skye bo'i rgyu can yin//  
 chos rnam yañ dag brjod pa'i sku//  
 ji lta ji ltar yin gsuñs pa//  
 phuñ po 'di dag sañs rgyas yin//

bodhyartha <sup>(10)</sup> pratyayodbhavāḥ/	rdzogs pa'i byañ chub rkyen du 'gyur//
te pi tathāgatāḥ khyātās	gñis med de bzin ñid 'jug pas//
tathatādvayayogataḥ//	de yañ de bzin gšegs par gsuñs// zes so//
(= SVT, 3-22~24)	
utsarggamaṇḍalavyavasthā	phyuñ ba'i dkyil 'khor gyi rim par phyē
caturthaḥ paricchedaḥ// //	ba ste gsum pa'o// //

(6) おわりに

長らく本誌に連載してきた Sāṅkr̥tyāyana 撮影の写真とチベット訳、そして他の parallel passage に基づく『安立次第論』の研究は、本稿をもって一応完結することになった。

しかし本誌148冊と156冊に、はじめの2篇を寄稿した時点では、ゲッチングン大学から提供された品質の悪いデジタルデータに基づいて写本を転写したため、いくつかの部分が判読不能のまま残されてしまった。ところが本誌160冊所収拙稿の(1)に記した事情により、これ以降は、より鮮明なデジタルデータが利用できるようになった。そのため以前の論文では判読不能だった部分のいくつかが判読できるようになった。そこで今後は、従来のローマ字化テキストを再検討するとともに、将来的には全文のテキストをまとめて、一篇のモノグラフとして刊行したいと考えている。

平成25年度学術研究助成基金助成金(基盤研究(C))「アジア各地における密教図像と文献の比較研究」の成果の一部。

- 1 『密教文化』に寄稿した拙稿「『秘密集会安立次第論』をめぐる諸問題——第3章所説の出生真言の解釈を中心に——」は、本稿執筆の時点で、いまだ刊行されていない。
- 2 Jiang, Zhongxin (蔣 忠 新) and Tomabechi, Toru (苦 米 地 等 流): *The Pañcakramatīpṣaṇī of Muniśrībhadrā*, Introduction and Romanized Sanskrit Text, Bern 1996, p.14.
- 3 ゲッティング大学所蔵のサンスクリット写本写真については、Bandurski, Frank: "Übersicht über die Göttinger Sammlungen der von Rāhula Sāṅkṛtyāyana in Tibet aufgefundenen buddhistischen Sanskrit-Texte (Funde buddhistischer Sanskrit-Handschriften, III)," in Bechert Heinz (ed.), *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden*, Beiheft 5, Göttingen 1994, pp.12-126. また XC14/30の内容については、苦米地等流「いわゆる Vajrācāryānyayottama について——新出関連写本の紹介——」(『密教図像』23 2004), pp.40-50 (横組) を参照。
- 4 同書については、北村太道・ツルティム・ケサン『秘密集会安立次第論註釈』(永田文昌堂2000) を参照。
- 5 Ibid., 130.
- 6 *The Kācyaṣaṣarivarta*, A Mahāyānasūtra of the Ratnakūṭa Class Edited in the Original Sanskrit in Tibetan and in Chinese, Peking 1926, 109-110.
- 7 北京 Vol.3, 237-2 (rgyud ca 252b)-1; デルゲ rgyud, ca, 170b-6~171a-1.
- 8 この問題については、拙稿「判読困難なサンスクリット写本を、いかに修補するか?—Nāgabodhi の『安立次第論』第1章に見るテキスト復元—」(『東文研紀要』156冊) 2009の註4 を参照。
- 9 Tib. suggests *svaśuci* for *aśuci*.
- 10 The Tibetan translation of the *Sandhivivākaraṇatantra* "byañ chub don gyi rkyen las byuñ" supports this reading.



# Nāgabodhi's \**Samājasādhnavyavasthālī*: The Tibetan Translation and Sanskrit Text of Chapter 3-3-4

TANAKA, Kimiaki

The \**Samājasādhnavyavasthālī* (hereafter: *Vyavasthālī*), attributed to Nāgabodhi/Nāgabuddhi of the Ārya school of interpretation of the *Guhyasamāja-tantra*, explains the philosophical significance of yoga involving the use of the maṇḍala, and considerable importance has been attached to it in Tibetan Buddhism, especially in the dGe-lugs-pa school. But until recently no Sanskrit manuscript of this work had been discovered. Recently, a complete manuscript of the *Vyavasthālī* was identified in Sector A of photograph Xc14/30 photographed by Rāhula Sāṅkr̥tyāyana in Tibet and later acquired by the Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek, Göttingen. Basing myself on this photograph, I have already published romanized editions of Chapter I, Chapter II, 3-1-3 to 3-3-3 of Chapter III and Chapter IV in *Memoirs of the Institute of Oriental Culture*. In this article I have transcribed the Sanskrit text of 3-3-4 of Chapter III. This chapter mainly explains the efficiency of maṇḍala practice of the *Guhyasamāja-tantra*. As is common in medieval manuscripts from Eastern India, the manuscript do not distinguish between ba and va. There is frequent confusion of sa and śa. In addition, sattva and tattva are regularly written satva and tatva, while a consonant after r (repha) is doubled, but these and other discrepancies with standard orthographical practice have been transcribed as they are. For further details, reference should be made to pp. 313-317.